

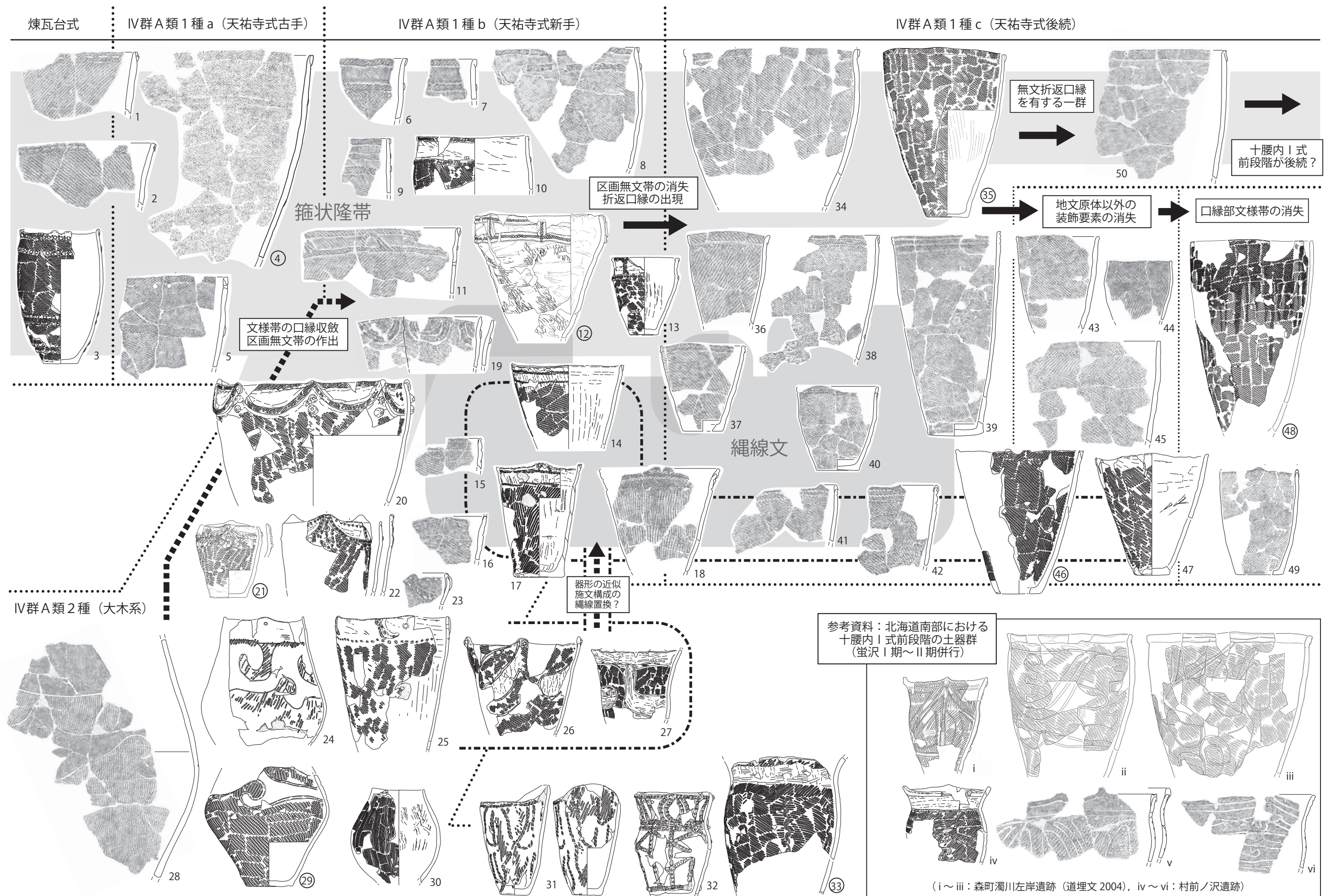
円筒上層式末期まで見られる肋骨状・連弧状モチーフの系譜についてはおそらくは上層 a 式までその系統を遡りうるものであるが、こうした連綿性とは別に「土器」あるいは「土器づくり」に求められる社会的な価値・位置というものについて、円筒上層 b 式以前と d 式以降については大きな差異を認めうるのではないかと、というのが本遺跡における円筒上層式を総覧した上での所感である。これが地域集団における社会構成自体の変容によるものであるか、さらに円筒土器文化総体に通じるものであるか極地集団的なものであるかは、他遺跡の資料も交え、土器以外に係る要素も含めたより詳細な検討が必要である。今後の課題としたい。（時田）

b. 縄文時代後期初頭の土器群について

第Ⅳ－6 図は本遺跡出土資料ならびに茂辺地 4 遺跡出土の縄文時代後期初頭に相当する土器群について分類し、その編年を試みたものである。大筋は既刊である茂辺地 4 遺跡発掘調査報告書総括において行った分類に沿うが、一部新規資料の発見に伴い改訂を加えている。系統としてはおおまかにふたつに分けられる。主体をなすのは大安在 B・ノダップⅡ・煉瓦台式といった中期後半～末葉の北海道在地系土器群の系譜にある天祐寺式の古段階・新段階およびその後続群の相当するⅣ群 A 類 1 種である。もう一方は、東北地方で展開する大木式の最末期である大木 10 式ならびにその後続型式（大木系）に相当するⅣ群 A 類 2 種である。

Ⅳ群 A 類 1 種に関しては、茂辺地 4 遺跡報告においては、主に箍状隆帯の貼付を伴う群について分類を行い、天祐寺式古手にあたる群（Ⅳ群 A 類 1 種 a）から新手（Ⅳ群 A 類 1 種 b）、さらに後続する型式（Ⅳ群 A 類 1 種 c：茂辺地 4 遺跡報告時のⅣ群 A 類 3 種が相当）と至る過程で、箍状文様帯の器体全面から口縁部への収斂・無文帯の作出→無文帯の消失・箍状文様帯の単純化→箍状要素そのものの消失、という連続した遷移を辿るものと推定した。本遺跡ではこれに加え、茂辺地 4 遺跡では寡少であった箍状に縄線文を巡らす群（以下「箍状縄線文群」と仮称する）についても一定数の資料が得られたため、これも含め考察を実施することが可能であった。その結果、箍状縄線文群についても、天祐寺式新式→後続と同じく、口縁部に箍状文ではさんだ無文帯を作出する群と、区画無文帯をもたず口縁端部に文様が収斂する群が確認でき、器形・施文構成等についても共通性が確認できたことから、同様の遷移状況にあるものと推定した。ただし、天祐寺式古手（Ⅳ群 A 類 1 種 a）に相当する「無文帯を持たず、口縁端部～底部にかけて箍状縄線文が数条めぐる」個体については確認できず、必ずしも天祐寺式と全く同根とはいえない状況にある。箍状縄線文群のうち無文帯を有する群（14～18）は、突起を有する口縁や底部から大きく広がりながら立ち上がる等、器形的特徴もより大木系に近似している。地文の施文方向等についても斜位回転による横走・縦走と天祐寺系とはやや趣を異としており（無文帯をもたない同系の群については天祐寺系と同様、原体縦回転による斜行縄文が主体である）、沈線を縄線文に置換するなどして、Ⅳ群 A 類 1 種 b 段階において発生した在地系の製作技法による大木系の模倣群である可能性が考えられる。同様の器形的特徴をもつ個体は、以降のⅣ群 A 類 1 種 c における各段階でも確認できる（41・42・46・47）。

次に、天祐寺式系（Ⅳ群 A 類 1 種）と大木系土器群（Ⅳ群 A 類 2 種）の相関についての本遺跡ならびに茂辺地 4 遺跡資料を総覧しての所感を述べる。Ⅳ群 A 類 2 種にあたる大木 10 式ならびに後続型式の土器群のうち口縁部に無文帯を有する群において特徴的な文様のひとつに、口縁突起下に垂下する C 字あるいは J 字状を呈する隆帯の貼付がある。本遺跡ならびに茂辺地 4 遺跡出土の同群においても同様の隆帯を有する個体はいくつか散見され、モチーフとしては C 字状（23・25）のほか「人」字状に貼付される例（21・22）がみられる。興味深いのは、口縁部無文帯＋「人」字状モチーフの隆帯という組み合わせを有する個体が、Ⅳ群 A 類 1 種 b の個体においても見られる（11）ほか、Ⅳ群 A 類 1 種にみられる幅広の隆帯と大木系の文様構成を兼備する両群の在地系折衷型式と推定される個体（19・20）においても確認されていることである。なお、箍状縄線文群においても、



第Ⅳ－6図 村前ノ沢遺跡・茂辺地4遺跡出土の後期初頭土器群編年
(○付数字のものは茂辺地4遺跡出土、ほかは村前ノ沢遺跡出土)

無文帯に「人」字状（15）あるいは「C」字状（16）の縄線文を施す個体が確認されており、同様の関連性をうかがわせる。これまで、天祐寺式新手の特徴である文様帯の収斂ならびに口縁部無文帯の作出には大木系の影響が想定されてきたが、同一・近接遺跡出土の在地系・大木系およびその折衷型式の3系統に共通した特徴が見出せたことはその関係性を追認する上で大きな意味をもつものと考えられる。その一方で、本遺跡における在地系の土器群と大木系の土器群における相関関係を見出せるのはこれらに関連する一部要素に限定されるのもまた事実である。例えば大木系の胴部に展開する充填縄文・磨消縄文・沈線文等からなる装飾要素を付与する個体はIV群A類1種に帰属する個体の中にはみられなかった。IV群A類2種に属する個体も総体に対して少数であり、時間的に遷移するなかで、両土器群の相関関係が一定かつ継続的であったとは判断し難い。

以上のように、本遺跡における後期初頭土器群においては、在地系と大木系の二系統の確認とその相関の様態において一定の整理・把握が可能であった。だが、必ずしもこれが同時期遺跡すべてに適用が可能なものとは考え難い。今後他の各遺跡でも同様の資料分析が行われ、比較検討によりいわゆる「涌元式」に総称される該当期の曖昧模糊とした土器群相関の詳細な把握とともに、縄文時代中期から後期への遷移期における当地の文化様相を^{ひもと}く端緒となれば幸いである。（時田）

（3）土製品

本遺跡出土の土製品には、土偶・環状土製品・匙状土製品・舟形土製品等がある。土偶類については1点を除き板状土偶およびそれに類する形状をもつものであり、これらは全て縄文時代中期・円筒上層式期に帰属するものと推定される。頭部を欠損するものが多いが遺存するものについてはいずれも顔面表現が見られなかった。これは、近接する茂辺地4遺跡における板状土偶においても共通してみられた特徴である。また、脚部先端を爪先・踵を有する足裏状に成形する例も複数個体みられており、当地における土偶製作における共通事項であったものと推定される。この他、全長全幅いずれも3cmに満たない極小の菱形土偶も出土している。腕部先端を貫通する横孔が穿たれており、垂飾品としての機能を有していたものと推定される。板状土偶腕部ならびに腋下部には貫通する孔が穿たれる例がまみられるが、それらの機能を類推する上で参考となる事例といえる。

土偶以外で特記すべきものとしては、器面に刺突文の加えられた2点の環状土製品があげられる。いずれも支沢始端の窪地周辺で包含層中より出土しており、列状を呈する刺突文の様相から、周辺で多量に出土している円筒上層式前半期に相当する資料であろうと推定される。2点のうち、小型のものについては表裏2面のうち一方にのみ刺突列が施され、もう一面は無文であり平滑・顕著な調整が加えられている。刺突列を施文する面には突起が付与され、その基部に貫通孔が穿たれていることなどから垂飾品としての機能が推測される。一方、もう一点である大型のものについては、表裏両面に刺突列が施され、突起・穿孔ともに有さない。

これらに類した環状土製品は北海道南部に所在する他遺跡でも類例がみられる。それらについて、該当遺物ならびに共伴する又は同一層より出土する資料について抜粋・図示し、加えて地図上に遺跡位置をプロットしたものが第IV-7図である。共通する特徴としては、突起・穿孔等の垂飾機能に係る成形がなされるものについては装飾は片面にのみなされ、単純に環状を呈するものについては表裏両面に装飾が施される。いずれも円筒上層式前半期・円筒上層a～c式が伴うことから、当該時期・地域における定型的な垂飾品のひとつであった可能性が考えられる。（時田）

（4）剥片石器

剥片類は、平成25・26年の2ヵ年の調査により総点数にして11,358点が出土している。うち素材・剥片（V・VI群）などを除く剥片石器は3,167点で約28%を占める。遺構からの剥片類の出土点数は1,264点で全体の約11%、うち剥片石器は60点で同類全出土数の2%未満に留まる。

調査区全体での出土状況は支沢始端部周辺から北西側緩斜面上に集中的に分布する。これは、土